



Title	『竹取物語』断簡（一軸）の紹介と翻刻
Author(s)	小林, 理正
Citation	詞林. 2023, 74, p. 1-12
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/93067
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『竹取物語』断簡（一軸）の紹介と翻刻

小林 理正

一 はじめに

多くの『竹取物語』写本は古活字十行本あるいはその刊本の写しであるという指摘が片桐洋一にある¹⁾。たとえば江戸時代中期ごろ写と目される九州大学国文学研究室蔵『竹取物語絵巻』（国文／別置／159）は、絵巻であるけれどその本文は無刊記版絵入板本（茨城多左衛門板）に基づくかと想定されている²⁾し、同大学附属図書館支子文庫蔵（奈良絵本）『竹取物語』もその本文は板本によるものと推定されている³⁾。絵巻であろうと、奈良絵本であろうと、その『竹取物語』の本文が刊本の写し、あるいはそれと系統を同じくする伝本に拠る場合のあることは、たしかなようである。

こうした本文状況を踏まえたうえで、架蔵『竹取物語』断簡（一軸）を確認したところ、その本文は刊本の引き写しではないことが知られた。刊本の写し、またはそれと同系統本に拠る場合の多い『竹取物語』伝本の中で、刊本と異なる本文

を備えることから架蔵断簡の紹介は『竹取物語』研究に僅かなりとも意義があるように思われる。このような考えから、本稿では架蔵『竹取物語』断簡（一軸）の紹介とその翻刻を行う。

ちなみに、既知の『竹取物語』断簡には伝後光厳院筆のもの（二条為定を筆者とするものもある）⁴⁾が一〇点ほど確認されている。しかしながら、そのほかのものはほとんど知られていない。架蔵断簡（一軸）は、本紙法量と筆跡から察するに同一資料から切り出され、そののち継がれたものと考えられる、伝後光厳院筆断簡群のツレでないことが明らかである。これまでに紹介されている断簡群のツレでないという点も架蔵断簡の紹介に踏み切った動機の一つとなっている。

二 書誌

架蔵断簡の書誌は以下のとおりとなっている。
装訂は、卷子装。金箔を蒔いた香色紙の表紙（縦二八・

一糶、横・三六・五糶）を持つ。題簽が貼られているものも何も記されていない。見返しには銀泥の下絵が施されている。なお現在の装訂は、本紙に見られるような巻皺等の損傷が全く見られないことから修補のさいに改められたものと考えられる。料紙は、鳥の子紙。本文は、上代様で書写されている。和歌書式は、直前の本文末尾で改行したのち、第一・二行目行頭を二字下げして記し、後続本文は改行後、行頭から書写するものである。「なには」と「ほうらい」とある箇所^⑤に朱合点がそれぞれ施されているが、これらのほかに傍書や異本注記等はない。なお損傷のために判読困難な字がいくつかある。

全五紙を継ぐその全長は、一四五・九糶。縦は二八・〇糶。各本紙の法量（横）は、次のとおりとなっている。なお、各紙の行数も合わせて記しておく。

【第一紙】横・四九・四横 【行数】二八行
 【第二紙】横・二二・七横 【行数】一三行
 【第三紙】横・二九・七横 【行数】一七行
 【第四紙】横・一・七横 【行数】一行
 【第五紙】横・四二・四横 【行数】二四行
 一行字数は、二三字〜二五字前後。字高は、行ごとに多少の差があるものの、二四・七〜二五・〇糶に収まる。識語や蔵書印などはない。近世写本かと思われるが、書写年代および書写者についてはよく分からない。

三 本文について

架蔵断簡は、蓬萊の玉の枝・火鼠の皮衣・帝の行幸、以上三つの場面の本文を備えている。以下、いくつか特徴的な本文を取りあげ、架蔵断簡の本文を確認していく。そのさい、中田剛直『竹取物語の研究 校異篇・解説篇』および王朝物語史研究会編『竹取物語本文集成』を参照し、諸本群との対照を行う。

まずは、くらのちの御子が「さをと、しのきさらきのとをかころ」に蓬萊の玉の枝を得るまでの偽りの首尾を翁に語る場面に続く本文を掲げる。

〈資料一〉第一紙

いのちしなはいか、はせむいきてあらむかきりはかくありきてほうらいといふらむ山にあふやとなみにた、よひこきあるきて我かくにのうちはなれてありきまはりしにあるときはなみあれつ、うみのそこにもいりぬへくあるときにはかせにつけてしらぬくに、ふきよせられておにのやうなるものいて来てころさむとしき

※ 「こきあるきて」の「る」は「り」の誤りか。

「なみにた、よひこきあるきて」とある箇所に異同が確認されている。たとえば新井本「うみにうきた、よひありく」、

武藤本「なみにこきた、よひありきて」のようなものがある。ここからは「うみ——なみ」の異なりがあると分かる。いま「なみ」とある伝本を搜すと、武藤本のほかに平瀬本、高山本、加賀本、武田本、久曾神昇氏蔵甲本、國學院本、前田本、島原本、『竹取翁物語解』などを見出すことができる。その中でも架蔵断簡と近似する本文を有しているものに『竹取翁物語解』が挙げられる。同書は「なみにた、よひこきありきて」との本文を備えており、架蔵断簡とほぼ一致する。

このように『竹取翁物語解』と軌を一にする事例は、ほかにもある。波線部「ありきまはりしに」とあるのもこれに該当する。当該本文のヴァリエーションを整理すると、次のようになる。群書類従本「ありき廻りしに」、『竹取翁物語解』「ありき廻しに」とあるのは、架蔵断簡との近さが疑われる。このほか新井本には「まかりありきしに」とある。諸本の多くが「ありきまかりしに」とあるのと語順が逆転している。正保版本は「ありき罷しに」とあって「まかり」に漢字を宛てる。これら以外には『竹取物語抄』・五十嵐本・『竹取物語裏解』が「ありきしに」との本文を有している。「廻りしに」とあるのを「まはりしに」と訓んだ結果、架蔵断簡の本文が生じたのか、あるいは逆に「まはりしに」とある本文が先発し、これを漢字で表記したことで「廻りしに」なる異文が生じたのか、はたまた「か（可）——は（八）」の誤写に起因する本文のヴァリエーションに過ぎないのか、その本文揺動

の実相を明確にすることは難しい⁶⁾。それゆえにここでは群書類従本および『竹取翁物語解』と、架蔵断簡のこの本文が近似している、という事実を指摘しておくに留める。

一方で、こうしたケースとは異なる例も架蔵断簡には確認される。掲出本文は、計略の露見したくちの御子が、これを恥じて山へ入ってしまったことを語る場面にくみものである。

〈資料二〉第二紙

みやつかさ、ふらふ人さみなてをわかちてもとめたてまつれともみまかりもやしたまひけむえ見つけたてまつらすなりぬみこの御供にかくしたまはむとてとしころみえ給はさりけるなりけり

「みまかりもや」とある箇所を諸本で確認すると、蓬左文庫本「御死もや」、前田本「御死にもや」、紹巴本「御しかりもや」、反町本「御かくれもや」、『竹取翁物語解』「御死もや」などのヴァリエーションが確認される。このほか、新井本のように該当本文を有しないもの、久曾神昇氏蔵甲本の「は、なくなりたまひつらん」のようなものもある。「みまかりもや」とあるものは、参看二書の中には見出せない。しかし当該本文をよく観察すると、紹巴本「御しかりもや」とその形態が酷似するように思われる。たとえば「ま（万）——し（事）」

の誤写を「みまかりもや」に想定すると、「みしかりもや」なる本文が生じる。そののち「み」に「御」の漢字を宛てる
と、「御しかりもや」となる。これは紹巴本の本文と一致している。紹巴本「御しかりもや」が意味不通なのは如上の本文転化を経て、いまに伝わるからなのであろう。

ちなみに注釈史上、この「みまかりもや」を支持した事例があることを確認している。たとえば佐佐木信綱『校註竹取物語』（東京堂、明治二五年）がそれに該当する。同書は『竹取翁物語解』を底本としながら、「身まがりもや」（二九頁）との校訂本文を作る。当時、「みまかりもや」とある伝本および紹巴本が未発見であったから、この本文校訂は『竹取翁物語解』の注解を踏まえた推測批判に基づくと推察される。

「御しにもや」を支持する本文理解が現在通行しているが、その再検証が必要であるだろう。

次は、箱に入れられている火鼠の皮衣を阿倍御主人が精査する場面の本文を確認する。

〈資料三〉第三紙

うるはしきるりをいろえてつくれりかはころもをみれは
 こんしやうの色なりけのす糸にはこかねのいろか、やき
 たりけにたからとみえうるはしきことならふへきものな
 しひにやけぬことよりもけうらなることならひなし

「こかねの」いろか、やきたり」とある点に注目したい。ここには新井本「ひかりをさきたり」、武藤本「ひかりしさ、きたり」、久曾神昇氏蔵甲本「ひかりしたり」、内閣文庫本「ひかりしか、やきたり」、滋岡本「ひかりさ、やきたり」のようなヴァリエーションがある。「さきたり」や「さ、きたり」および「さ、やきたり」などは『新全集』が頭注（三九頁）にて指摘するように「か、やきたり」とあったものを「か」と「さ」の誤写のために損傷したものと考えられる。

このような異なりが確認される中、架蔵断簡独自の本文に「（こかねの）いろ」がある。「いろか、やきたりたからとみえ」に相当する本文を有しない平瀬本を除くと、諸本「ひかり」「光」とあるから、誤写に因る本文転化は想定しづらい。たとえば波線部「こんしやうの色なり」とあったのを承けて（あるいはそれに引きずられて）「けのす糸にはこかねのいろか、やきたり」と改めたようにも思われるが、その実のところはよく分からない。

架蔵断簡には独自異文も備わっている、という点をここで押えておく。

四 おわりに

略書誌および本文の中から、特徴的なものをいくつか取りあげ、架蔵断簡の有り様をこれまで簡単にだが確認してきた。その結果、刊本とだけ重なる、あるいは類似する本文もあれ

ば、紹巴本との近さが疑われる本文もあることが知られた。けれども架蔵断簡の正確な位置づけを明らかにするのに量的不足は否めない。より詳細な調査・本文吟味はツレの出現を承け、改めて行いたいと考えている。

ツレと思しき断簡等についてお知りの方は、何卒ご教示いただきたい。

【注】

(1) 片桐洋一・福井貞助・高橋正治・清水好子校注・訳者『新編日本古典文学全集 竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』（小学館、平成一八年・第五刷）解説（九八頁）。『竹取物語』の校注・訳者は片桐。

(2) 九州大学附属図書館「日本古典籍 所蔵資料解説…竹取物語 絵巻」(<https://guides.lib.kyushu-u.ac.jp/c.php?g=774839&p=5560035>) に拠る（執筆者は田村隆・今西祐一郎）。最終アクセス日：2023年9月2日）。

(3) 『在九州国文資料影印叢書 竹取物語・伊勢物語』（在九州国文資料影印叢書刊行会、昭和五四年）解題（執筆者…中島あや子）。絵巻および奈良絵本の本文が刊本の写しであるケースの存在は、中田剛直による詳細な諸本調査からも知られるところである（『竹取物語の研究 校異篇・解説篇』物語文学研究叢書第2巻（クレス出版、平成一一年））。

(4) 高田信敬「竹取物語断簡新出二葉——（付）延べ書き「富士山記」——」（『国文学研究資料館研究紀要』第十号、昭和五九年三月）にて紹介された、都立中央図書館蔵手鑑『古筆名帖』に押

される一葉がそれである。

(5) 注（2）中田同書、王朝物語史研究会編『竹取物語本文集成』（勉誠出版、平成二〇年）。なお本稿で校異を掲げるさいの各伝本名称は、主に中田のものに拠るが、同書未収本については後者参照のもと私に略名称を作った。

(6) 同様の問題が想定される事例に「くるまちのみこ」（第二紙）も挙げられようか。ここには「くらもち」以外に「くらもり」（新井本）、「くらまゆ」（武藤本）のごとき違いが確認されている。その中で『竹取翁物語解』は「車持皇子」（第二巻・五〇丁オ）との本文を有している。なお意味上の差異がないと判断されたからなのであろう、中田『竹取物語の研究 校異篇・解説篇』ではこの「車持皇子」をめぐる表記の異なりは採られていない。

(7) 架蔵断簡「みまかりもや」は次のように書写されている。

【参考一】架蔵断簡・第二紙



ちなみに、紹巴本「御しかりもや」の字母は「御志可利毛也」（二三丁オ）とある（王朝物語史研究会編『紹巴本竹取物語 原寸影印』勉誠出版、平成二〇年）。「し（志）」から「ま」への誤写は想定しづらいことから、紹巴本の本文から「みまかりもや」が生じたと考えるのは難しい。

(8) 佐佐木の校訂は、『竹取翁物語解』の次に掲げる注解を踏ま

えてのものと推察される。なお句読を切る、清濁を区別する、鉤括弧等の記号を付ける、ゴチック表示するなどの措置を施して本文を掲げた。なお同書にある傍線はそのまま残した。

○『竹取翁物語解』第二巻・五二丁ウ・五三才

○「御死もや」は必誤有べし。今俗こそ御死去などはいへ、御しにとは云べくもあらず。御字^{ミツ}衍^{ミツ}歟。或は下に詞多く脱せるなるべし。今はしばらく御字よまで有べし。御子の御行方を探求する人の得見付奉らで思へる心なり。

「御死もや」には「必誤」が「有」とされる。当該本文を不審とする理解は本文揺動の有り様からも見てとれることができる。佐木の「身まがりもや」なる本文校訂は、如上の本文不審に対する回答であったと考えられる。

ちなみに、高山市郷土館（現飛騨高山まちの博物館）蔵『竹取翁物語解』（稿本）には第一文が「○「御死もや」諸本かくのごとし」（第二冊・四五丁才）とあつて刊本との間に異同が確認されている。

※『竹取翁物語解』の本文は国文学研究資料館「国書データベース」

にて公開される広島大学図書館蔵本 (<https://kokushonijiac.jp/biblio/100312000/1> 函号：大國／780) に、高山市郷土館（現飛騨高山まちの博物館）蔵『竹取翁物語解』（稿本）の本文は国文学研究資料館蔵の紙焼き写真（E2973/1）に拠る。

【附記一】

本稿は、日本学術振興会特別研究員奨励費（課題番号：23K11989）の助成を受けた研究成果の一部である。

（こばやし ただまさ・日本学術振興会特別研究員（PD））

【翻刻】

◆凡例

○ 架蔵『竹取物語』断簡（一軸）を翻刻する。

○ 原則、改行は原本どおりとするが、架蔵断簡の一行字数が原稿の一行字数を越える場合にきぎり、これを例外的に改行した（第五紙）。

○ 「二」と小さく片仮名で記す事例があるが、翻刻にあたってこれを「に」へ改めた。

○ 判読困難字は□で示し、残画から推読できる場合は「囲み表示」で表示した。

○ ミセケチは「取り消し線」で表示した。

○ 架蔵断簡にある朱合点は、これを省略した。

○ 参考までに『新編日本古典文学全集』と、中田剛直『竹取物語の研究 校異篇・解説篇』および王朝物語史研究会編『竹取物語本文集成』の該当頁を各紙の翻刻末尾に掲げた。

【第一紙】

おきなみこにまをすやういかなるところにかこの木は
さふらひけむあやくうるはしくめてたきものにも
とまをすみこ、たへてのたまはくさをと、しの
きさらきのとをかころになにはよりふねにのりてう
みなかにいて、ゆかむかたもしらすおほへしかと思□
ことならてはよのなかにいき□てなにかせむとおもひ

しかはた、むなしきかせにまかせてありくいのちし
なはいか、はせむいきてあらむかきりはかくありきて
ほうらいといふらむ山にあふやとなみにた、よひこ
きあるきて我かくにのうちはなれてありきまは
りしにあるときはなみあれつ、うみのそこにもいりぬ
へくあるときにはかせにつけてしらぬくに、ふきよせ
られておにのやうなるものいて来てころさむとしき
あるときにはこしかたゆくすゑもしらすうみにまき
れんとしきあるときにはかてつきもてくさのねをく
ひものとしきあるときにはいはむかたなくむくつけ、
なるものきてくひか、らむとしきあるときには海
のかひをとりていのちをつくたひのそらにたすく
へき人もなきところいろ／＼のやまひをしてゆく
へすらもおほえすふねのゆくにまかせてうみにた、よひ
て五百日といふにたつのときはかりうみのなかにはつかに
やま見ゆふねのなかをなむせて見るうみの上に
た、よへる山いと大にてありその山のさまたかくうる
はしこれや我かもとむる山ならむと思へとさすかに
おそろしくおほへてやまのめくりをさしめくらし
てふつかみかはかり見あるくに天人のよそひしたる
女山のなかよりいて来てしろかねのなまひをも
てみつをくみありくこれを見てふねよりおりてこの

○『新全集』三〇～三二頁

○『竹取物語の研究 校異篇・解説篇』三九～四四頁

○『竹取物語本文集成』一一八～一三六頁

【第二紙】

かのうれへせしたくみらをはかくやひめよひすゑて
うれしき人ともなりといひてろくいとのおほくとらせたまふ
たくみ^らいみしくよろこひておもひつるやうにもある
かなといひてかへるみちにてくるまもちのみこちの
なかる、まてちやうせさせたまふろくえしかひもなくと
りすてさせたまひてければにけうせにけりかくてこのみ
こ一生のはちこれにするはあらし女をえすなりぬる
のみにあらすあめのしたのひとの見たまはむことの
はつかしきこと、のたまひてた、ひと、ころふかき山へ
いり給ひぬみやつかさ、ふらふ人さみなてをわかち
てもとめたてまつれともみまかりもやしたまひけむえ
見つけたてまつらすなりぬみこの御供にかくした
まはむとてとしころみえ給はさりけるなりけりこれを

○『新全集』三六～三七頁

○『竹取物語の研究 校異篇・解説篇』五〇～五一頁

○『竹取物語本文集成』一七一～一七九頁

【第三紙】

うるはしきるりをいろえてつくれりかはころをもみ
れはこんしやうの色なりけのすゑにはこかねのいろか
、やきたりけにたからとみえうるはしきことならふ
へきものなしひにやけぬことよりもけうらなることなら
ひなしうへかくやひめのこのもしかり給ふにこそあれ
とのたまひてあなかしことではこにいたたまひてもの、
えたにつけて御身のけさういといたくしてやかてとまりな

むものそとおほしてうたよみくはへてもちてしまし
たりそのうたは

かきりなきおもひにやけぬかはころもたもとか
はきてけふこそは見め

といへりいへのかとにもていたりてたり竹取いてきてと
りいれてかくやひめにみすかくやひめかのかはころもを
見ていはくうるはしきかはなめりわきてまことのかは
ならむともしらすたけとりこたへていはくとまれかくま
れまつしやうしいれたてまつらむよのなかにみえぬかは
ころものさまなればこれをまこと、おもひたまひね人

○『新全集』三九～四〇頁

○『竹取物語の研究 校異篇・解説篇』五五～五七頁

○『竹取物語本文集成』二〇一～二二二頁

【第四紙】

ないたくわひさせたてまつらせたまひそといひてよひす

○『新全集』四〇頁

○『竹取物語の研究 校異篇・解説篇』五七～五八頁

○『竹取物語本文集成』二二一～二二二頁

【第五紙】

りともまかりておほせたまはむとそうすこれをきこし
めしておほせ給ふやうなとかおきなのてにおほしたて
たらむものをこゝろにまかせさらむものをこのをうなもしたて

まつりたるものならはおきなにかうふりをなとかたはせ

掛

さらむおきなよろこひていへにかへりてかくやひめに
かたらふやうかくなむみかとのおほせたまへるなほ

やはつかうまつり給はぬといへはかくやひめこたへてい
はくもはらさやうのみやつかへつかうまつらしとおもふ
をしひてつかうまつらせたまは、きえうせなむすみつか
さかうふりつかうまつりてしぬはかりなりおきないら
ふるやうなしたまひそつかさかうふりもわか子を見た
てまつらてはなに、かはせむさはありともなとかみやつかへ
をし給はさらむしにたまふやうやはあるへきといふ

なほそらことかつかうまつらせてしなすやあると見給
へあまたの人のこゝろさしおろかならざりしをむなく
なしてしこそあれきのふけふみかとの、たまはむことに
つかむ人き、やさしといへはおきなこたへていはくあめの
したのことはとありともかゝりとも御いのちのあやふき
こそおほきなるさはりなれなほつかうまつりまじきこと
をまゐりてまをさむとてまゐりてまをすやうおほ

せのこのかしこさにかのわらはをまゐらせむとてつかう
まつればみやつかひにたしたてなはしぬへしとまをす
みやつこまろかてにうませたる子にてもあらずむかし
山にて見つけたるか、れはこゝろはせもよの人にすそ

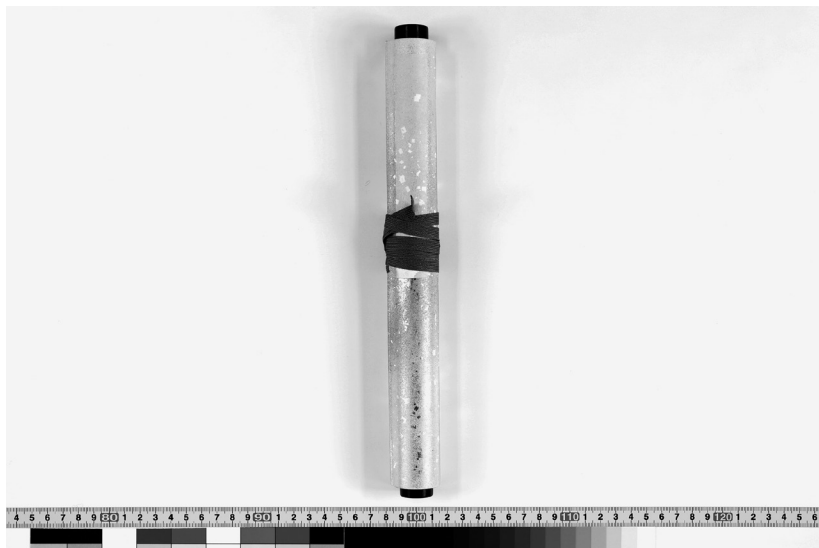
○『新全集』五九～六〇頁

○『竹取物語の研究 校異篇・解説篇』八八～九二頁

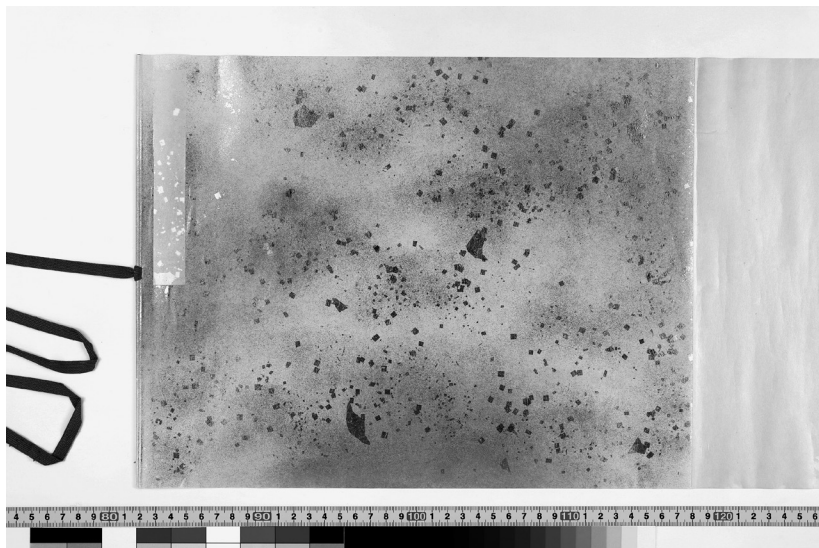
○『竹取物語本文集成』三七五～三九三頁

『竹取物語』断简（一軸）の紹介と翻刻（小林）

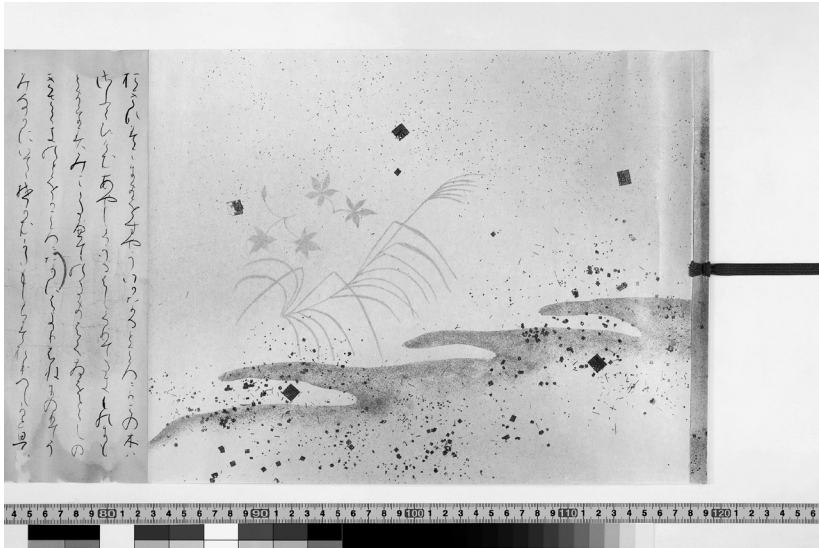
【図Ⅰ】



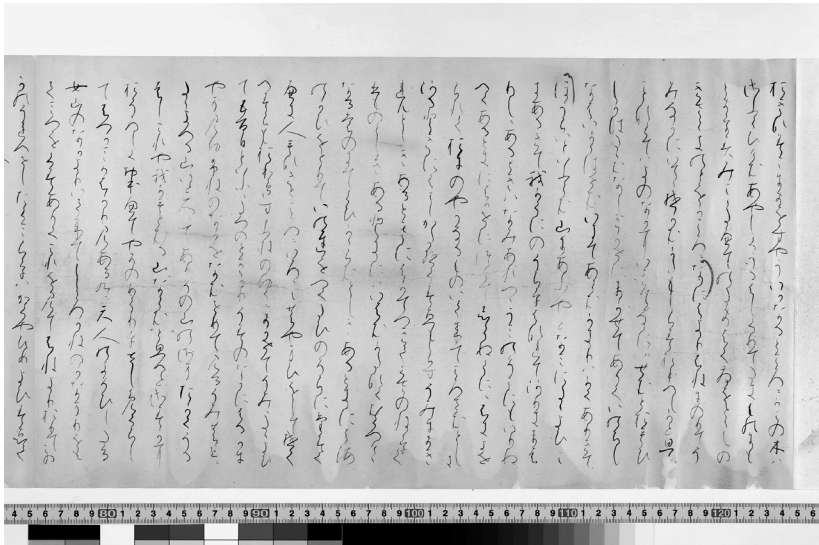
【図Ⅱ】



【図Ⅲ】



【図Ⅳ】 本紙1

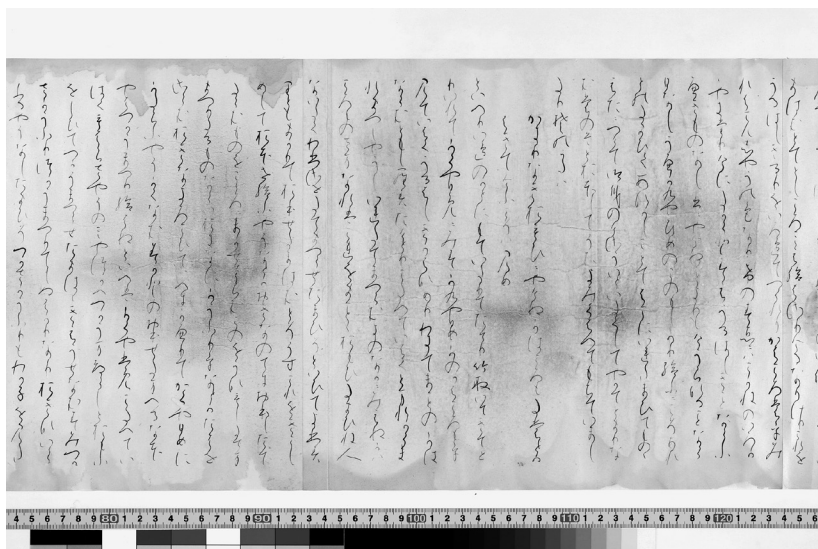


『竹取物語』断簡（一軸）の紹介と翻刻（小林）

【図Ⅴ】本紙2～3



【図Ⅵ】本紙3～5



【図Ⅶ】 本紙4～5



【図Ⅷ】

